

第 6 回

製糸夏期大学講演要旨

会 期 1953 年 8 月 21 日, 22 日, 23 日

場 所 農林省蚕糸試験場岡谷製糸試験所講堂

蚕糸業と繭増産

講師 京都工芸繊維大学教授 小 西 俊 夫

1. 蚕糸業の現在以上の発展にとつて、繭増産は如何に重要であるか。
2. 戦時及敗戦直後の繭生産縮少は如何なる原因の下に、如何なる影響を蚕糸業に与えたか。
3. 朝鮮事変後の繭増産は如何に進んでいるか。
4. 今後における繭増産の可能性があるか。
 - イ. 農家経済の立場からどうか
 - ロ. 蚕糸業としてこれを要請すべきか
 - ハ. 国民経済としてはこれを望み得るか
 - ニ. 繊維経済全体としての可能性
5. 繭増産を促進する蚕糸業及その政策は、如何にあるべきか。

合成繊維のわいたちと将来

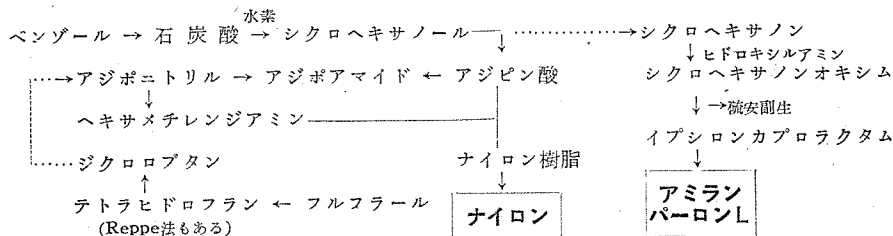
講師 東京大学教授 理学博士 祖 父 江 寛

1. 人絹の誕生と合成樹脂の進歩
2. ナイロンの発明とこれにつづくもの
3. 合成繊維の現況と他繊維との競争
4. 合成繊維の種類と製法
5. 各種合成繊維の性質
6. 高分子化学の進歩と合成繊維の将来

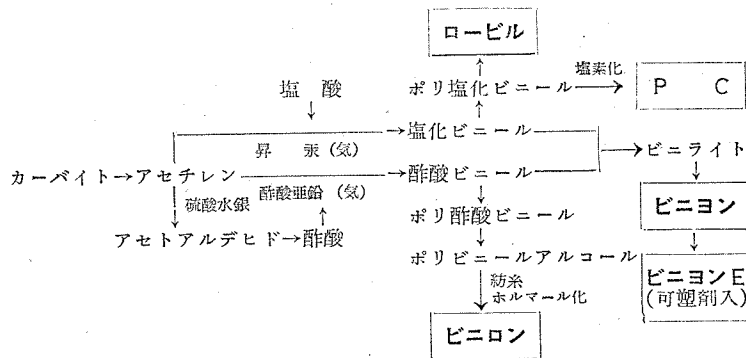
1838年	塩化ビニール, レニヨール (仏)
1846年	硝化綿, シェンバイン (スイス)
1865年	酢酸セルローズ, シュツェンベルゲル (独)
1884年	人絹, シャルドンネ (仏)
1891年	ビスコース, クロス, ビバン (英)
1899年	銅安糸, ベンベルグ社 (独)
1901年	グリブタール, スミス (米)
1909年	ベークライト, ベークランド (米)
1913年	酢酸ビニール, グリーシャイムエレクトロ社 (独)
1921年	尿素樹脂 (ポロパス), ポラック (奥)

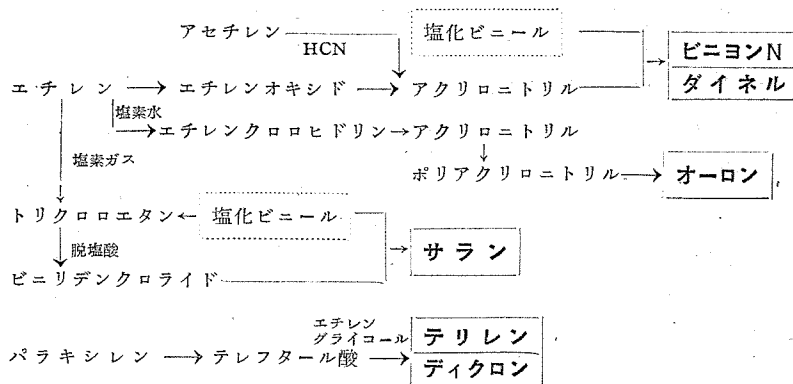
1923年	ノボラック, アルバートバーレンド (米)
1926年	ポバール, ヘルマン (独)
1927年	セラニース人絹, セラニース社 (英)
1931年	デュブレン, ニューラント (白系米人)
1932年	ポリエステル合成繊維, カローザス (米)
1934年	ブナ, I G社 (独)
1938年	ナイロン (発表) Du pont カローザス (米)
//	P. C. Faser, I G社 (独)
//	ビニオン, アメリカンビスコース
1939年	カネビヤン合成1号, 矢沢, 李 (日)
1940年	パーロン, アミラン, I G (独) 東レ (日)
1943年	ビニオンE, アメリカンビスコース
1944年	ポリエチレン繊維, Du Pont. CCC (米)
1947年	テリレン, I C I (英)
1948年	ビニオンN, CCC社 (米)
	オーロン, Du Pont 社 (米)
1950年	デェクロン //
	ダイネル, CCC社 (米)

ナイロン系の製法



ビニール系の製法





セリシンの新しい研究

講師 東京農工大学繊維学部教授 岡 本 奨

1. 最近のセリシン研究の成果

セリシンの研究がどの程度現在行われているかを、試みに最近の日本蚕糸学会誌及び同講演会の報告から拾つてみると次の通りである。

(第 1 表)

	学 会 誌		講 演 会	
	20 卷 (昭 26)	21 卷 (昭 27)	22 回 (昭 27)	23 回 (昭 28)
総 発 表 件 数	72	54	135	121
内セリシ関係	0	1	0	0

即ちセリシンそのものに関する研究は誠に寥々たる有様である。しかしこの研究が全く忘れられているわけではなく、例えば九大農学部佐々木研究室、信大繊維学部の西沢研究室、農林省蚕糸試験場の清水研究室その他一二の民間研究所で、基礎的な研究がコツコツ行われている。それにしても製糸工業への自働繰糸機の導入などに伴うセリシンの問題の重要性に比べて、セリシン研究者の少いことを改めて痛感せざるを得ないのである。以下乏しい乍ら現在行われているセリシン研究の一端を紹介し、セリシン研究陣の拡大のためにいささかなりとも参考になれば幸と思う次第である。

2. 湿熱によるセリシンの“変性”

繰糸工程並びに糸質に直接関係してくる問題として實際上最も大きなことは、セリシンの所謂“変性”である。

セリシンに“とけ易いセリシン”と“とけにくいセリシン”との性質の異なる2種類が存在することは、早くから井上氏¹⁾によつて認められ、外層のとけ易い方を α -セリシン、内層のとけにくい方を β -セリシンと命名され、爾来多数のセリシン研究者が、或いは溶解度法により、或いは等電点法により、或いは塩析法その他により、2種類又はそれ以上のセリシンを分別して、セリシンA、B；セリシンI、II；オイセリシン、ブソイドセリシンなどと命名し、その何れかが井上氏の α 又は β セリシン——とけ易いセリシン又はとけにくいセリシンに殆ど該当するとしていることは周知の事実である。これら兩種の